

言要類纂

明治三庚午年

外國教師護衛之部

卷之廿

東京大学
庶務課

8

五十年史料

85

此書今在也

唐子
上日朝

大子少校

給出た手紙

此書初めは思ふに我々も東京府に在りては
河原に在りては思ふに我々も東京府に在りては
高田に在りては思ふに我々も東京府に在りては

上日朝

大子少校

此書初めは思ふに我々も東京府に在りては
河原に在りては思ふに我々も東京府に在りては
高田に在りては思ふに我々も東京府に在りては
東京府に在りては思ふに我々も東京府に在りては
東京府に在りては思ふに我々も東京府に在りては
東京府に在りては思ふに我々も東京府に在りては
東京府に在りては思ふに我々も東京府に在りては
東京府に在りては思ふに我々も東京府に在りては

唐子
上日朝

大子少校

大子少校

當校以府市士族原此增多，亦成
 薩清海部所分，是而為急也
 市部各名之，在四年，計之，此等事
 當分計之，撰之，而一，此等事，此等
 事者，一，列之，如如，人，此等事，此等
 事者，一，此等事，此等事，此等事，此等
 撰之，上，此等事，此等事，此等事，此等

大學南校

うむあふふ

庚午

ナリノマ

大學南校

初聲石

乙

此方より一歩運上るやま回るふゆふ
能通も一歩一歩進むはなれぬふゆふ
可なり新しきふゆふ

南校南校ふふ南校南校
大學南校

南校南校ふふ南校南校
南校南校ふふ南校南校

大學南校

美知致
申立候
都食人
小御様

与知
表分

此後又ハ海船ヲ甚クモ我ニ在ル者ハ
又ハ必ヨリ其ノ事故ニ至ルハ東京
府ニ於テ其ノ義ヲ知ルベキハ何有
シ我々ニ在ル者ハ及ビ其ノ事ハ

午月海
之者

大學南校

中

大學南校

儀御省へ御採

卷八

午
上
月
晦

大學南校

市

大

三知ろめ

庚午

ナリノコ

大學南校

初巻

一

此の如くは運上りてある間も
融通の事ありてあるは
可なり

南校抄成る所故に
後世に傳へりてあるは
人より傳へる事ありてあるは
あるは
南校抄成る所故に
後世に傳へりてあるは
人より傳へる事ありてあるは
あるは

大學南校
 右門外山柳方寸如也者者
 手板了了通新此准
 心

庚午

ナリノ言

外管前

大學南校

以中

遇石別子想日借所一而恒及以動者如
 右身分々不主東東府官信之知在回庭
 知力其知者一城之自出所也知力之知府
 之知利之知借所也之知計也之知
 中城之知不主止者向廣清之知名知負
 知一知利之知以知者之知實知利之知知者
 知知一知也之知者之知公之知以借所一知
 之知知力其知者之知之知知今之知之知

大學南校

此山ありて人負ふて之を立之て名を新
中と云ふ事は一向に實然と云ふ人
出度者之て事實に是を以て御名之
可也之て中より御名之て之を以て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名

庚午三月一日

外務省

大學南校中

是日大學南校中より書有附別より御名之て
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名
之て御名之て御名之て御名之て御名

大學南校

東家府君撰之有在者有於之
多一紙以一所者有之其力所
南有合之其下通以旦人合之其
物撰之其下越之其下其力所
與一其下其下其下其下其下
中其下其下其下其下其下
多一其下其下其下其下其下
其下其下其下其下其下其下

庚午

三月

不給省

大學南校

一

校以中其下其下其下其下其下
其下其下其下其下其下其下
折合其下其下其下其下其下

十

大學南校

別紙に人念出たて候也しと申知事
當校に於ては應儀人負増しに候
古人念に當校に採用し人念に
此に於て新中の人念に一層入
費に不敷なり古人念に堅固実道
に名に檢査の上中候に人念に
人念に人念に人念に人念に

大學南校

大旱而交

卷之四

大學句義

庚子
二月

大學南校

東京大学

南校

庚子

